　六月二日早朝、二人でウォーキングに出たとき、常照さんが、「今日はずいぶんいい、体調が戻ったみたいや」と言いました。翌朝の三日には、「すごくいい、よくなった」と。

主には疲れが原因でしょうが、すっかり病人になっていた常照さんです。月が変わると同時に快復した様子で、活動再開の目途が立って参りました。五月七日に前立腺肥大の診断を受け、それからほぼ四週間、合間にリモートは休み休みながらさせて頂き、法務にも出かけていましたので、完全な病人ではありませんでしたが、静養が必要な状態でした。元来、休むということが出来ない人で、動けなくなるまで休まないのです。機械じゃないのだから、と言っても無理の利く間は動いていないと気が済まないようです。心配した重い病気ではなく、腰痛も手術を要するような事態ではなかったので安堵致しました。三重松林寺の森住職様から、「末長くお世話になりたいので、この機会にしっかり静養してください」と言っていただき、五月の刈谷本願道場と三重松林寺本願道場はお休みさせて頂きました。健康志向はとても高く、暴飲暴食は避け、スイミングに長年通っているのも、大石先生を見習ってお腹が出ないように努力しているのです。ですから、今回のダウンで、スイミングはお休み、静養を余儀なくされました。これは如来様から与えられた休養だったと思わされております。

今回、排尿困難になった常照さんのために、どくだみ茶を煎じて飲むようになりました。どくだみは境内に群生しています。花が咲いた今頃が採り時だと聞いたので、どくだみを摘んで洗い、小分けにしてひもで束ね、干しました。ゆっくりした時間ができたお陰で、こういう作業も二人、共同作業でさせていただきました。考えてみれば、昨年の十月に住職を継職してから、休みらしい休みがなかったね、と二人で笑って話したことです。

　私は、常照さんに栄養を摂ってもらおうと料理を考えながら、気づいたことがありました。こんな風に、常照さんの健康を気づかって料理をしたことが、ここ十数年なかったなということです。今でこそ、いっしょに各地の本願道場を廻らせて頂き、仲良く二人三脚の歩みをしているようですが、ずっと二人の距離は遠かったのです。京都から家族でお寺に帰って来ると、常照さんは人が変わりました。何事も夫婦で相談していたのに、一人で行動するようになり、間もなくブラジルへ行きました。見知らぬ土地に来て、お寺の生活に馴れていない私は、そのときの心細さから、常照さんに裏切られた、見捨てられたという被害者意識がしっかり根付いてしまいました。常照さんは地球の果てまで出かけ、人の世話をするけれど、私たち妻や子は視界に無く、少しでも愚痴をこぼすと睨み叱る怖い夫であり父親でした。そういう亀裂の生じた関係に相乗して子どもの不登校や非行が重なると、さらにお互いを責め合い、どちらも引かないで、最悪の関係となっていました。お寺に住む人間が、人には言えないようなお粗末なあり様です。表面上は何もないかのような表情を装いながら、内面では冷たい氷を抱えてさみしく暗い日々を送っていました。

　いつ、冷たい氷が溶けたのか、それは常照さんが帰命の一念発起し、弥陀たのむとならされたときから、常照さんの氷が溶かされ、水となり、湯とならされる過程で、私の氷が同時に少しずつ溶かされて来たのでしょうか。あんなに固く冷たかった氷が、不思議と無くなっています。かつて、先生にお手紙で家庭の窮状を訴えたとき、先生が次のようなお返事を下さいました。

　　　　　　（前文略）

　　　『歎異抄』後序、聖人のつねのおおせには弥陀

　　　五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえ

　　　に（いちにん）が為なりけり。とあ

　　　ります。　長仁寺の寺族の誰か一人、このお

　　　言葉を頂かれたら解決です。しかしそれに

　　　は聖人様が　「親鸞一人」をどのように頂い

　　　ておられるか。「さればそくばくの業をもち

　　　ける身にてありけるを助けんと思召したち

　　　ける本願のかたじけなさよ」と、ひとしくご

　　　本願をおしいただいておられます。

　　　自力を出したらすべて「･････曠劫（こうご

　　　う）を劫歴（こうりゃく）せん」と聖人様が

　　　申しておられます。私自身、長い間迷うてき

　　　ました。

　　　　　平成十八年十二月二十八日

　　江本法喜様　　　　　　　　　　　　　　　大石法夫

　五月、岐阜本願道場の田中秀法様宅に一晩泊めて頂いた翌朝、二人で散歩に出かけました。川添いを歩いていると、外に出ておられた年配の奥さんが、「夫婦でお散歩、いいですね」と声を掛けて下さいました。それはどこから聞こえて来たのかと思われる奥さんの声でした。私たちのこと？、と一瞬戸惑いました。そういう実感が無かったからです。そしてすぐ、「ありがとうございます」と言いました。そんな風にその奥さんには見えたのか、これはおかげさま以外に無いなあとうれしくなりました。「信心が無ければ、夫婦もぴったりしませんよ。親子もぴったりしませんよ」先生にご縁を頂いた最初の頃に聞かせて頂いていました。ぴったりとなる術がわかりません。彷徨い続けました。ずいぶん回り道をしたような気持ちですが、回り道がそのまま、浄土往きの必然の道でした。二人とも、それぞれがそれぞれの業を果たすために、通らねばならない道がありました。常照さんは常照さんの道をひたすら歩んでいました。私は私で、私の業を果たさねばなりませんでした。その真っ最中には、お互いをいたわる余裕も無く、がむしゃらに我が思いを果たそうともがき、あがいて傷つけあうしか無かったのです。やはり先生に教えて頂いた空海さまのお言葉「哀れなるかな　哀れなるかな　長眠の子　苦しいかな　痛ましいかな　狂酔の人」が実感として味わえます。それだけだったら、こうして穏やかな気持ちで常照さんに料理を作らせて頂く日など、到底来なかっただろうと思います。そこに教えのご縁があったおかげで、今日の日を迎えられたのだと、改めて仏法のおかげを思わされます。無明を生きている私だと気づくのに必要な日々でした。常照さんが休養とならされたおかげで、これまでの在り方を振り返らせて頂きました。

　しかし、もうそのことで沈むことはありません。そのような迷いの日暮のおかげで、お浄土に生まれさせて頂いたのですから。後ろを振り向かず、前へ前へと進ませて頂きます。常照さんが、住職継承を終えたあと、二馬力と称して各地の本願道場へ同行させてくれます。自分では一馬力の力も無いと自覚しているのですが、常照さんは二馬力と言ってくれます。今まで、別々に歩んで来たようで、ご本願の世界では、一つだったのです。もともと一つなのに、自力では分からないのです。本来、一つなのです。努力して一つになろうとしたのではありません。本来の姿に還らされたのです。だから、自然です。

　最近では、自分たちより若い年代の方々のご縁が増えて参りました。今までは、年配の方々に向かえて頂く立場だったのが、自分たちが若い人たちをお迎えする立場にいつの間にかなっています。次の世代の方々が仏法のご縁に遇って下さることは何よりの励みになります。また、先生が私たちをこういう風に迎えて下さっていたのだなあと、先生方のお気持ちに心が及びます。このごろ、各地の本願道場にお参りの方々とのご縁も増え、ずいぶん賑やかになって参りました。昔から共に聞法してきた方とのご縁も続いております。

　大牟田の村上道場の蓮沼さんは、通信や長仁寺報をお届けすると、必ずお葉書を下さいます。今回も、長仁寺報第２０号をお送りしたあと、すぐにお葉書を下さいました。先に目を通した常照さんが「ありがたい内容だ」と言いながら手渡してくれました。いつか、蓮沼さんのおはがきを寺報に載せたいと思っていたので、今回は蓮沼さんに了解を得て、掲載させていただきます。

　　　一か月前には新緑で輝いていた麦畑も、黄

　　　金色となり、やがておとずれる収穫の日を

　　　静かに、何のためらいもなく待ってるかのよ

　　　うな麦たち。田舎道を運転しながら五月の

　　　輪読会の準備のための買い物へ向かっていま

　　　した。　そんななか、私の頭のなかでは、姉妹

　　　のごとくおつきあいし、教えも聞いてきた同

　　　行さんのことでいっぱいでした。　念仏どころ

　　　か、教えも、正信偈さえも記憶から消えて

　　　しまい、自分の存在さえも消してしまおう

　　　と悩み苦しんでいた友に、なんとか師のお言

　　　葉を届けたく、捕虜を何人も殺害した帰還

　　　兵の苦悩から、救われて心やすらかに亡く

　　　なっていかれた様子をメールしましたが、時

　　　期早々だったとおもいました。

　　　　他人様に真宗の救いということを伝えるに

　　　は自分自身が救われてないことには･････。

　　　とそのとき、大石先生から厳しく叱責され

　　　たことが聞こえてきました。

　　　『アナタがそうなってますか！』

　　　　　　（後略）

　寺報第２０号を読んで下さってのお便りです。

先生のお言葉を書いて下さいました。

　大石先生のご法座に見えていた方々は、蓮沼さんのことはよくご存知です。蓮沼さんとこうしてお葉書の交換を続けさせていただけるのは、お互い、同じ師のお育てを頂いたおかげです。蓮沼さんとは、同じような悩みを共有し、よく語り合いました。娘の智慧子をよく可愛がっていただき、智慧子を連れて、大牟田の村上さん宅へも泊りに行かせて頂きました。しかし、お互いを理解し合えるようになったのは、ごく最近になってからのような気がします。先生とお別れしたあと、それぞれ歳も重ね、落されたおかげでしょう。

　また、今月の掲示板に掲載させて頂いたお言葉は、

やはり、長仁寺報第２０号をお送りしたあと、頂いたお手紙に書いて下さっていたものです。こちら伊藤喜和さんは、三年前にお亡くなりになった伊藤光郎様の奥様です。やはり、私と同じ業をお持ちの奥様で、ときどきお電話を頂きますが、同じ業を抱えていることで、言葉を超えた分かり合える世界があります。

　朝の勤行で奈津美さんと御書信を拝読することは何回か、書かせて頂いておりますが、奈津美さんの感想を聞かせて頂くのが新鮮な感動です。はじめて仏法に触れる奈津美さんは、はじめは「なんにも引っかからない」とか、「わからない」と怪訝な表情をしていました。それが最近では、先生の御書信を指して、「この世界だけが確かなものだと思う」というようなことを言われるようになり、こちらの方が驚くのです。子どもにも恵まれ、順風満帆であるのに、最近は、自分の人生はどうなるのか、不安を感じていたようなのです。そこへちょうど御書信を拝読することになり、すうっと大石先生の世界に引き込まれたようです。その変化を間近で見ると、私は先生の御書信の威力をまざまざと見せられる思いです。また、ご本願の見えないおはたらきを感じさせていただきます。この妙術ともいえるおはたらきは、如来様のお仕業としか思えません。宗教に無縁だった若い人によって、時代や国を超えた真実の世界の普遍性が証明されます。世の中はお寺離れが加速していますが、それは必ずしも宗教離れでは無いということがわかります。

　この度の常照さんの静養の時を生かし、以前から気になっていた長仁寺ホームページのリニューアルに着手させて頂いております。長仁寺のホームページを開設させて頂いたのは、二〇一二年でした。これまで、何度か手を加えてはきましたが、本格的にテコ入れをしたいと思ったのは、本願道場やリモート、本の紹介を載せたいからです。本願道場を紹介したり、本の紹介を載せたり、業者さんに協力していただき、進めている段階です。資料を準備しながら思い出しました。このホームページを最初に開設したとき、長仁寺をどう紹介するか、常照さんといろいろ議論しながら進めました。常照さんは「教法を第一に」という信念がありました。また、山門の下に、□、△、○の形の石を埋め込んで、その画像を載せ、どんな人も入れるお寺という世界を表しました。私は地図の記号にあるお寺の卍（まんじ）について調べ、光が発せられる所という意味や、風に吹かれて回る風車の意味があることを知り、物や人が入れ替わり立ち替わりする中心となる所と知らされました。また、先生に御法座に来て頂いていたころ、長仁寺のことを願って、「江本さんが帰命となったら、光は長仁寺から、そうなるんよ」と発破をかけられたことを思い出しました。まだ自力いっぱいだった私は、「本当かなあ」と疑いを抱いて先生のお言葉を聞いていましたが、あのころの長仁寺を思えば、今の長仁寺の現状は奇跡に近いことが現実になりつつあります。自力であっても、葬式仏教から抜け出したいと願って活動を続け、いろいろ失敗や挫折を繰り返しながら、今は、本願道場という形にたどり着きました。その活動の背後に、ご本願があります。

　仏法を聞く人は少ないのが実情ですが、今回ご紹介したように、若い人たちが続いて下さっています。意外に多いとも言えます。多かろうと、少なかろうと、この道を進ませて頂きます。ご本願に乗託させていただいたら、ご本願に乗せられて進ませていただけるのです。願わくば衆生と共にの願いに乗せられるのです。

　今回は長々と字も細かく、読みづらい方もおられたことと思います。最後までお読み下さり、ありがとうございました。

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　　　　　　　　　　　　　　　合掌

令和五年六月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜

常照、法喜にご用の方は

こちらの携帯におかけください。

　090-5476-3586